



News Letter

No. **9** October 2006

21st Century COE Program
Center for Evolutionary Cognitive Sciences at The University of Tokyo

言語と経済の起源と進化



橋本 敬
(北陸先端科学技術大学院大学)

私は、言語の起源と進化を解明しようとする進化言語学を最近の研究活動の中心としている。言語起源は、おそらく人間だけが持つこの言語を操る能力の生物学的進化であり、本 COE のテーマともなっている。言語進化の研究は、そういった能力により、あるいは、その能力の進化とともに、言語自体がどのように構造化・複雑化してきたのかを考える。この進化現象は、生物進化、個体の学習、文化進化が関連し、さらには、学習と文化の間にも相互作用フィードバックがある複雑な過程だと考えられる。私は、二つの相互作用ループが同時に働くという意味で「言語進化のダブルループ・ダイナミクス」と呼んでいる。言語の起源と進化は強く関連し、また連続的な過程と考えられているので、言語の起源と進化に関する国際会議では生物学者や言語学者や脳科学者、その他様々な分野の研究者が入り交じって討論が繰り広げられる。日本進化学会でも3年連続でシンポジウムを開催し、やはり、多くの分野の人たちと議論を重ねてきた。私は進化言語学の研究と並行して、進化経済学という領域にいる経済学者達とも一緒に仕事をしている。この分野では、「進化」を生物進化よりも広くとらえ、どちらかという、生物進化をメタファーとした、経済構造や制度の形成と変化を研究対象とする。この経済というもの、言語と同じくらいにヒト特有の形質ではないだろうか。多くの生物が種固有のコミュニケーションを行うように、簡単な交換や制度は人間以外の動物でも見られる。しかし、様々な形態をとる貨幣の使用、複雑な市場における交換、多くの制度が複合的に存在し変化していく社会など、人間の社会でしか見られない現象は数多い。そうすると、経済活動や制度形成を行う能力の生物進化と、経済構造や制度の構造化・複雑化の過程を、進化言語学と同様な視点で連続的に捉えることは human nature を理解する上で重要となるだろう。このように考えると、上記のダブルループ・ダイナミクスは別に言語に限定されたものではなく、経済や社会を含めた、集団的構造を形成する能力とその能力による集団的構造の共進化という過程全般にあるダイナミクスとも思える。もちろん、現在の社会に見られる経済と制度の複雑な構造は、近年になって多に発達したものである。経済とその進化を成り立たせる能力としては、適切に価値判断したり、他者を信用・信頼したり、文化を形成・伝達したりと、もっと絞ったものを考えて、進化心理学的な研究を行うべきである。しかし、それだけで現在の経済・社会の起源と進化がわかるとも思えないので、進化心理学だけに還元される問題ではない。最近では、進化経済学の教科書を作ろうという動きが出て、私も参加させていただいている。しかし、上のような意味での、すなわち、本 COE の射程に入るような人間のこころの働きとしての経済の起源と進化はまだ教科書に載るような話ではない。近年は、行動経済学や神経経済学など、経済活動に生物学的基盤を与えようという動きが活発である。経済の起源と進化の研究まで、もう一歩だろう。

Contents

| | |
|---|-----|
| 言語と経済の起源と進化 | 1 |
| 第4回国際ワークショップ [Physical and Psychological Reasoning in Infancy] | 2 |
| 第5回国際ワークショップ [Human Sentence Processing and Production] | 3 |
| 日本言語学会ワークショップ | 4 |
| ICGG4 | 5 |
| 新しい研究動向—こんな研究をはじめました! | 6-7 |
| 活動報告 (2006年6月~2006年9月) | 8 |

第4回国際ワークショップ

「Physical and Psychological Reasoning in Infancy」

2006年6月25日に、本COEの第4回国際ワークショップが駒場キャンパス学際交流ホールで開催されました。日曜日の開催にもかかわらず大勢ご参加していただきました。今回の国際ワークショップは、「Physical and Psychological Reasoning in Infancy」と題して、乳児の「物」と「心」の認知・理解について探究することを趣旨としました。



ワークショップはこの分野で国際的に活躍の5名の研究者を国内外からお招きし、最先端の話題提供をして頂きました。(ワークショップで配布した抄録集はCOEホームページ:<http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp/activity/activity2006.html#infancy>からダウンロードできます)

イリノイ大学(米国)のRenée Baillargeon教授は、基調講演として、「Causal reasoning in infancy」と題したご発表をされました。Baillargeon教授は今日の乳児研究を牽引されてきたパイオニアの一人です。講演は、乳児の物理的知識や心理的知識がどのように発達するのかについて、自らのラボで行われた沢山の実験事例を紹介しつつ、示唆に富んだものでした。フロアからも沢山の質問が飛び交いました。

2人目の旦直子博士(本COE研究員)は、「Infant recognition of televised events」と題して、乳児によるテレビの認知についてご発表されました。昨今、テレビの発達の影響が懸念されていますが、実際には実証的研究が非常に少ないのが現状です。旦博士の講演では実世界の物理事象の認知とTV映像上での事象の認知の比較から興味深い発表が行われました。

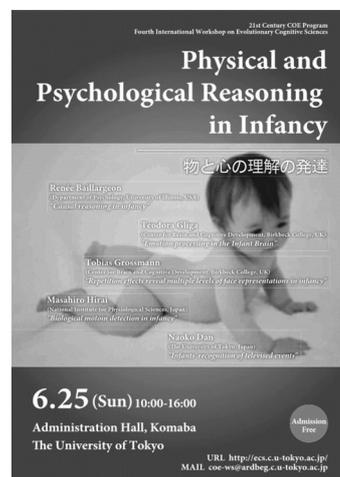
3人目のTobias Grossmann博士(CBCD, Birkbeck College)は、「Emotion processing in the infant brain」と題してご講演されました。感情の発達の認知にERPを用いた研究の発表であり、乳児の感情表現に関して、顔表情と音声情報がどう関連しているのか最先端の手法を用いてご研究されていました。

4人目の平井真洋博士(日本学術振興会研究員)は、「Biological motion detection in infancy」と題して、成人・乳児をターゲットとしたERPによるご発表をされました。平井博士は、昨年度まで本COEの研究員として沢山の業績をあげられており、本ワークショップでもバイオロジカルモーションに関する興味深い研究をお聞きすることができました。

5人目のTeodora Gliga博士(CBCD, Birkbeck College)は、「Repetition effects reveal multiple levels of face representation in infancy」と題して、乳児の顔認知に関するご発表をされました。

最後になりますが、本ワークショップは、旦直子さん、松田剛さん、宮崎美智子さん(本COE研究員)をはじめとする多くの若手研究者が中心となって企画、運営されたものです。彼らの若い力なしには、これほど成功しなかったと思います。この場をお借りして感謝します。

(開一夫、認知発達臨床科学部門)



第5回国際ワークショップ 「Human Sentence Processing and Production」

2006年7月14日から15日にかけて、東京大学駒場キャンパス18号館ホールにて、本COEの第5回国際ワークショップ「Human Sentence Processing and Production」を、電子情報通信学会基礎境界ソサエティ思考と言語研究会との共催で行いました。ワークショップの趣旨は、人間による言語理解および産出の心的メカニズムを探るという大きな目標のもと、様々な理論的および方法論的アプローチの研究成果を分かち合うというもので、今回特に電子情報通信学会のコミュニティからは工学的知見や興味を背景とする方々の参加が期待されました。また、近年、理論言語学を専門の中心にされる方々にとっても、心理実験の成果が有用なデータとして注目を集めており、このワークショップがそういった方向を少しでも後押しするような一助となればという狙いもありました。そういった効果を意識して招待講演者としてお招きしたFranklin Chang (NTT Communication Science Laboratories)、Yoshihisa Kitagawa (Indiana University)、Mineharu Nakayama (Ohio State University)、Katsuo Tamaoka (Hiroshima University)、Hiroko Yamashita (Rochester Institute of Technology) 諸氏がほぼ手弁当で最新の研究成果の講演を行って下さいました。改めて感謝いたします。

本COEの国際ワークショップとしては今回は比較的小規模で、口頭発表セッションのみで企画しました。発表募集のアナウンスが遅めだったにもかかわらず、COEワークショップのセッション（英語による発表）には招待講演5件の他に9件（うち海外からの応募6件）、思考と言語研究会（日本語による発表）には7件の発表があり、またその分野も言語理解を中心に、工学から応用心理学までの多岐にわたるもので、二日間に収めるのが困難な程の盛りだくさんな内容となりました。また、予想をはるかに上回る多くの方々（2日間延べ110名あまり）にご参加いただくことができました。さらに、2日ともみっちり朝から夕方まで、少しハードスケジュール気味だったにもかかわらず、講演者とフロアの間で、また時にはフロアの参加者間でたいへん活発なディスカッションが行われました。初日夕方に同じく18号館で行われた懇親会にも多くの方々に参加されました。ディスカッションの続きはもちろん、普段同じ研究会の場を共にする機会が得にくいような方々同士で親交を深めたり、情報交換を行っていただけたのはこの上ない成果だと感じております。

最後に、共催くださった電子情報通信学会基礎境界ソサエティ思考と言語研究会にこの場を借りて御礼申し上げます。また、準備・運営に関わる諸業務において大いに活躍して下さった特別研究員および大学院生、学部生の方々に深く感謝いたします。



プログラムなどの詳細は以下のサイトでご覧いただけます。

<http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp/activity/activity2006.html#HSPP>

(広瀬友紀、心理言語科学部門)

日本語学会ワークショップ

6月17日および18日、東京大学駒場キャンパスにおいて「日本語学会第132回大会」が開催され、本COEの研究プロジェクト「空間移動の言語化に関する対照研究」から「空間移動表現の類型論的研究—直示移動表現を中心に」と題するワークショップ（企画者：守田貴弘、司会：ラマルル・クリスティーン）を行いました。ワークショップはラマルルによるプロジェクトの総合的な目的と方法に続き、3つの個別発表と全体討論で構成されました。

まず、第一の個別発表「日仏語の直示表現と類型内の多様性」（守田貴弘）では、移動表現の研究において同じ類型内に属するとされる日本語とフランス語の間に見られる系統的な差異を明らかにすると同時に、その差異の要因に関する分析が発表されました。次に、「中国語の移動表現に見られる選好パターン—日本語と比較して」（相原まり子、C. ラマルル）では、異なる類型に属する日本語と中国語で類似している点があることが発表され、また、データの性質によって好まれる表現パターンに一定の傾向があることが述べられました。最後に「英語、ドイツ語、ロシア語における空間移動表現—日本語との対比において」（古賀裕章、青木葉子、コロスコワ・ユリア、水野真紀子）では、直示表現を中心に分析した場合、同じ類型に属する英語、ドイツ語、ロシア語が異なる振る舞いを見せることが発表されました。

今回のワークショップで扱った言語は日本語、フランス語、中国語、英語、ドイツ語、そしてロシア語というように多岐に渡り、このような幅広い語族に属する多様な言語に基づく研究はCOEプロジェクトならではのものです。また、会場もほぼ満席となる盛況ぶりで、各発表の後にはフロアから多数の質問もなされ、特に日本では話題に上ることの少ないドイツ語やロシア語を含めた研究の注目度が伺える結果となりました。



発表された各研究は、各言語のデータ集とともに報告論文集として2007年に刊行される予定です（本プロジェクトはC. ラマルル・大堀壽夫が担当）。

（守田貴弘、現 言語情報科学専攻博士課程/フランス・社会科学高等学院 [EHESS] 博士課程/元 本COE 拠点形成アシスタント）

（写真：秋田裕一氏提供）

ICCG4



第4回国際構文理論学会（The Fourth International Conference on Construction Grammar, ICCG4）は本年9月1日～3日、東京大学駒場キャンパスにおいて開催され、総計21カ国、248人の参加者数を数えた。開催にあたっては、本学COE「心とことば」、同「共生のための国際哲学交流センター」、言語情報科学専攻、および日本学術振興会の国際研究集会助成と東京大学の一高記念基金学術研究集会支援金による助成を受けた。開催校委員として大堀壽夫、坂原茂、坪井栄治郎、西村義樹、藤井聖子、ラマルル・クリスティン（50音順）が準備にあたった。応募論文は140編を越え、世界各地の研究者（計18名）にブラインドレフェリーを依頼し、76編の口頭発表と20編のポスター発表を採択した。

大会は9月1日、木畑学部長と長谷川COEリーダーの挨拶によって開会された。招待講演者であったCollin Baker（International Computer Science Institute）、Charles J. Fillmore（ICSI & Univ. of California at Berkeley）、Adele Goldberg（Princeton Univ.）、広瀬幸生（筑波大学）、Knud Lambrecht（Univ. of Texas at Austin）、松本曜（神戸大学）、Jan-Ola Östman（Univ. of Helsinki）、柴谷方良（Rice Univ.）、Michael Tomasello（Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology）の9氏はいずれも言語理論における先端的研究成果をもって知られ、日本においても多くの支持者を獲得している。構文文法理論の創始者の一人であり、長く文法研究において指導的役割を果たしてきたFillmore教授は、直観とコーパス利用の融合による構文記述の高度化を提唱した。またBaker教授はFrameNetプロジェクト（コーパス利用の語彙資源構築）の最新の動向について講演を行い、今後の言語研究の重要な方向性を示した。Tomasello教授、および初来日となるGoldberg教授は言語習得を構文ネットワークの形成と見ることで、より経験的妥当性の高い習得理論を展開した。また、Goldberg教授は言語理論における一般化とは何かについて再検討を行った。この点はÖstman教授の基調講演のテーマとも相通じるものであり、とりわけ若手の研究者にとって、言語研究の基盤を見つめ直す好機となった。柴谷教授は言語の動態相としての文法化を構文プロトタイプとその拡張という観点から分析した。初来日となるLambrecht教授は構文に情報構造がどのように反映されるかについて、精緻な分析を示した。国内からの基調講演者となった廣瀬教授、松本教授の発表はともに対照言語学的視点からの洞察に満ちた発表であり、多くの討論を呼び起こした。

口頭発表およびポスター発表はいずれも高い水準のもので、意味論・語用論的側面を重視しつつ具体的な言語データを詳細に調べることで、新たな言語事実の発見と討議が活発に行われた。一般発表においても学界の最前線で活躍する研究者による高い水準の発表が目白押しであったことは特筆に値する。口頭発表はもとより、ポスター発表においてもフロアが満杯になるほどの盛況であった。国際的業績を挙げてきた研究者たちが若手研究者のポスター発表に真剣に聞き入り、直接討論に参加してアドバイスをを行ったことは、きわめて有意義なことであった。

会議全体を通じ、特にわが国において本研究集会を催したことの意義は次の2点において見いだされる。第一に、構文の概念を軸にすえた文法研究は、わが国では語法・辞書研究という形で長い間尊重されてきたが、そのような伝統を引き継ぐ多くの研究者が本研究集会に参加し、これまで点に過ぎなかった様々な動きを、構文の概念を軸にした文法理論によって統合する可能性が開かれた。第二に、アジア地域からの発表者およびアジア諸言語を対象とした発表が相当数あり、これによって、英語やドイツ語などのヨーロッパ語を中心としてこれまで行われてきた構文理論に新たな展望を開いた。

大会の発表論文は、レフェリーを経た上でJohn Benjamins社（オランダ）刊行のシリーズConstructional Approaches to Languageとして成果を公開する。また、国内においても研究の最新動向を示す論文をセレクトして翻訳出版することも計画している。研究社「英語青年」誌には大会レポートが掲載予定である。

大会ウェブページURL <http://gamp.c.u-tokyo.ac.jp/~iccg2006/iccg2006.html>

（大堀壽夫・藤井聖子、統合言語科学部門）

新しい研究動向—こん

社会的認知・経済学的意思決定の進化・神経生物学基盤の研究

高橋泰城

認知神経科学・神経経済学における研究をホルモンや神経伝達物質など分子レベルで融合させることを目指し、以下のようなテーマにおける研究をおこなっている。

(A) 社会的認知機能の神経化学、神経生理学

協力行動や言語コミュニケーションなど認知神経生物学上興味深い現象の背後にある生体分子メカニズムを解明することを目的とする。ホルモンなどや神経伝達物質を非侵襲的に測定し、認知タスク遂行中の神経活動計測 (Event-related brain potentialなど) と組み合わせることにより、社会的認知機能の脳認知神経科学的な理解を可能にする。特に、社会的評価が行われている状況での時間知覚エラー脳波反応がストレスホルモンによってどのように制御されているか、が目下の研究テーマである。

(B) 経済学的意思決定 (神経経済学)

将来の時点Dで得られる報酬V(D)を合理的に割引くためには、

$$V(D) = V(0) \exp(-kD)$$

という指数関数の割引関数 (指数割引) にしがった時間選好が必要である。しかし、動物やヒトの実際の行動は、

$$V(D) = V(0)/(1+kD)$$

という、双曲割引関数に従うことが知られている。どちらの場合もkが大きいくほど、割引率 (dV/dD)/V が大きく、近視眼的な意思決定となる。双曲関数の場合には割引率がDの増大とともに減少する (=k/(1+kD))。従って、将来の自分は今の自分より忍耐強いという錯覚が存在するため、時間経過とともに選好の逆転がおきてしまうという時間的非整合性が存在する。割引率や時間的非整合性の生物学的基盤を解明するため以下の研究をおこなっている。

(B-1) 薬物依存と異時点消費選択行動 (intertemporal discounting)

薬物依存者においては、自己抑制の欠如が問題となるが (Ohmura et al. 2005)、自己抑制の問題は時間割引関数が指数型ではなく、双曲型の関数に従うことによって生じる。認知哲学者ダニエル・デネットが、自由意志の進化において双曲型関数から指数関数へと割引関数形がシフトすることが重要であると論じているが、この過程はまさに薬物依存からの回復過程において期待されるものである。本研究計画においては、久里浜アルコール症センターの協力を得て、アルコール症患者におけるdiscountingの変化をトレースし、どのような神経活動の変化が、自由意志の進化にとって必要であるかを解明することを目指し

ている。

(B-2) 神経ホルモンと時間割引

これまでに、cortisol濃度低下→amygdala活動低下→時間割引率増大というプロセスで、低すぎるcortisol濃度が、psychopathicな衝動的意思決定を引き起こすことを見出した (Takahashi, 2004) が、従来よりテストステロン (男性ホルモンの一種) も、衝動的な意思決定と関与がある可能性が指摘されてきた。実際に男性被験者でしらべてみると、テストステロン濃度が高い人のほうが、双曲時間割引因子=1/(1+双曲割引率) が大きいことを見出された (Takahashi et al., 2006)。脳内でテストステロンが女性ホルモンに変換され、近視眼的意思決定をむしろ抑制している可能性がある。

(B-3) discountingの時間的非整合性の分析

デネットによれば、時間割引における非整合性が自由意志の進化において重大な障害になると考えられるが、(経済学者によるものを除くと) 神経科学や認知科学の研究で時間的非整合性を問題にしたdiscountingの研究は少ない。本研究計画では、時間割引の意思決定における時間的非整合性の分析方法とその神経生物学的基盤の解明を目指す。その際に有力な手がかりは時間知覚が従うWeber-Fechner則である (Takahashi, 2005; Takahashi, 2006)。

参考文献:

- Ohmura Y., Takahashi T., Kitamura N. (2005) "Discounting delayed and probabilistic monetary gains and losses by smokers of cigarettes." *Psychopharmacology (Berl)*, 182(4), 508-515.
- Takahashi T. (2004) "Cortisol levels and time-discounting of monetary gain in humans." *Neuroreport*, 15(13), 2145-2147.
- Takahashi T. (2005) "Loss of self-control in intertemporal choice may be attributable to logarithmic time-perception." *Med Hypotheses*, 65(4), 691-693.
- Takahashi T. (2006) "Time-estimation error following Weber-Fechner law may explain subadditive time-discounting." *Med Hypotheses*, 67, 1372-1374.
- Takahashi T., Sakaguchi K., Oki M., Hasegawa T. (in press) "Sex hormonal modulation of hyperbolic discount factor in men." *NeuroPsychoEconomics*.

な研究をはじめました!

文処理の時間的特性 - 文を長時間提示すると解釈が困難になる? -

植月美希

特別な訓練を行わなくても、障害や疾患がない限り、ある年齢になれば人間は言葉を理解し、話すことが出来る。言語の処理は非常に高速で行われ、多くの場合には瞬時に終了するため、実際にどのような処理が我々の頭の中で行われているのかを検討することには困難が伴い、これまで様々な刺激文や実験手法が工夫されて来た。

文処理の研究でよく使用される刺激として、ガーデンパス (袋小路) 文と呼ばれるものがある。これは、文を解釈する途中で、以前に作った構造を破棄し、新たな構造を作らなくてはならない (=再解析が必要とされる) 文のことである。ここで、ガーデンパス文の (1) と、再解析の必要ない (2) の処理を比較してみよう。

- (1) 春代が習字を始めた春美に手紙を送った
- (2) 春代が習字を始めた話題に春美が弾んだ

(1) では、「春代が習字を始めた」までを読んだ段階では、「習字を始めたのは春代である」と解釈できる。しかし、「(春代が習字を始めた) 春美に」までを読むと、「習字を始めたのは春美である」という解釈を破棄し、「習字を始めたのは春美である」と解釈し直さなくてはならない (図1)。このように文解釈の誤りが明らかになる部分では文を読む時間が長くなる現象が見られる (「ガーデンパス現象」と呼ばれる)。この現象を手がかりとして、我々の文処理メカニズムを明らかにしようとする試みが行われている。

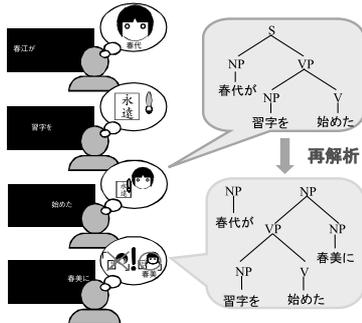


図1. 文を読んでいる際に想定される構造解釈。

このようなタイプの文をここではコントロール文と呼ぶ。

文処理の研究では、刺激文の他に実験手法も様々に工夫されて来た。例えば、眼球運動測定法、Self-Paced Reading (SPR) 法、質問紙法、脳波測定法などが挙げられる。しかし、これらの実験手法では得られるデータの個人差が比較的大きく、多数の実験参加者を必要とするといった短所がある。また、これらの実験手法では、基本的には読み手に読みやすい時間で文が提示されており、文処理や文表象の時間的特性についてはほとんど分かっていない。そこで私は現在、より精度の高い精神物理学的実験手法を使用して、文処理の時間的特性について実験的に検討を行っている。

実験 (文理解課題) では、ガーデンパス文とコントロール文を文節ごとに様々な速度で提示し、文提示後にはその文の内容について質

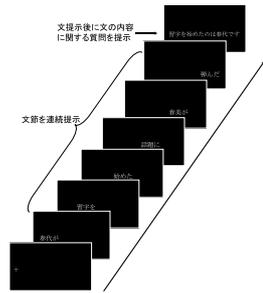


図2. 文刺激の提示方法。まず注視点 (+) を提示した後、1文節ずつを画面に提示した。1文の提示が終了すると、その文の内容に関する質問が提示される。実験参加者は質問に対して、キーを押して回答した。

問を提示し (図2)、文をどの程度理解しているのかを測定した。なお、文節の提示速度は133msから3,000msの6段階に変化させ、幅広い提示速度に対する文理解パフォーマンスを調べた。その結果、各文節が150ms前後で提示される短提示時間条件では文解釈が難しいものの、各文節が300ms前後で提示されたときに最も正答率が高く、ほぼ正確に文理解が行われることが明らかになった。なお、注目すべきは、長提示時間条件

(1,000ms以上) ではコントロール文は文理解が損なわれぬのに対し、ガーデンパス文では文理解が阻害されることが示された点である (図3)。これらの結果から、文を解釈するには少なくとも1文節に300msほど時間が掛かること、提示時間が長いからと言って必ずしも文理解が容易になる訳ではなく、ガーデンパス文では逆に文理解が困難になることが明らかになった。

この長提示時間条件下のガーデンパス文の理解の低下が、文の記憶が阻害されたために生じているのかについて更に調べたところ (再認課題)、どの提示時間条件においてもガーデンパス文とコントロール文の記憶成績には差がないことが明らかになった (図4)。このことから、文理解課題において長提示時間条件でガーデンパス文の正答率が低下していたのは (図3)、ガーデンパス文の記憶はできているにもかかわらず、その解釈に失敗していたためであることが明らかになった。これは、文の再解析を行わねばならないガーデンパス文のみで見られたため、再解析後の文表象の時間的特性を示している可能性が考えられる。つまり、再解析後に新たに構築された文の表象は、再解析がない場合の文表象よりも利用できる時間が短いことを示唆しているのかもしれない。今後は、このような文表象の時間的特性について更に検討を行う予定である。

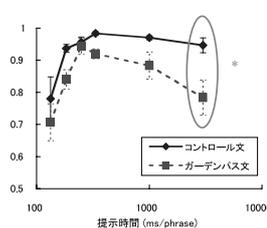


図3. 文理解課題で、各提示時間条件の正答率を示した。ガーデンパス文とコントロール文の正答率の差は3,000msの条件で統計的に有意であった。

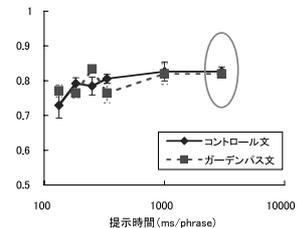


図4. 再認課題で、各提示時間条件の正答率を示した。どの提示時間条件においても、ガーデンパス文とコントロール文の正答率の差は統計的に有意ではなかった。

活動報告 (2006年6月~2006年9月)

1 COE 研究発表会 (事業推進者等の研究発表・討論会)

第40回 COE研究会: オープンラボにおけるPDポスター発表会

日時: 2006年6月2日
場所: 東京大学駒場キャンパス 17号館COEオフィス
発表者:

小林由紀「日本語派生名詞の処理過程 -ERPを用いた検討-」、岩井智彦「韓国手話を探る」、植月美希「日本語構造的曖昧文の解釈選好性」、大江朋子「ステレオタイプ抑制方略とリバウンド効果」、戸次大介「自然言語の文法とデカルト積」、小堀修「バイ菌・ウイルスに対する破局的な認知と強迫性障害との関係」、伊藤匡「サバン症候群の認知機能と臨床像」、上野有理「食物を介した母子間交渉の発達」、大塚明香「音楽の構造的聴取に関わる脳磁界 (MEG) 反応」、角(本田) 恵理「近縁種の求愛歌に対するエゾエンマコオロギの反応」、高橋泰城「社会的認知・時間選好の神経経済学」、高橋麻理子「インドクジャクの配偶者選択におけるオスの求愛音声の重要性」、且直子「乳児期におけるテレビ映像認知の発達」、福高宏器「脳の中の自己と他者: 他人の損得の知覚に関わる神経活動」、松田剛「なぜテレビゲーム中に前頭前野の血流は低下するのか?」、宮崎美智子「2歳児におけるライブビデオ自己映像の認知」、久保寺俊朗「周辺刺激は中心刺激の「見え」を調節する」、濱崎裕子「カンイザル脳のプロテオーム解析」

2 COEシンポジウム・セミナー(共催のものも含む)

第35回: COE主催国際ワークショップ

The Fourth International Workshop on Evolutionary Cognitive Sciences "Physical and Psychological Reasoning in Infancy"

日時: 2006年6月25日
場所: 東京大学駒場キャンパス アドミニストレーション棟 学生交流ホール
担当: 関一夫、且直子、宮崎美智子、松田剛
* 本号の特集記事参照

第36回: COE主催国際ワークショップ

The Fifth International Workshop on Evolutionary Cognitive Sciences "Human Sentence Processing and Production"

日時: 2006年7月14~15日
場所: 東京大学駒場キャンパス 18号館ホール
担当: 広瀬友紀
共催: 電子情報通信学会思考と言語研究会 (TL) 研究会
* 本号の特集記事参照

第37回: COE共催国際会議

The Fourth International Conference on Construction Grammar (ICCG4)

日時: 2006年9月1~3日
場所: 東京大学駒場キャンパス
担当: 藤井聖子、大塚明香
* 本号の特集記事参照

3 COE主催・共催研究会

第70回: COE共催講演会: 戴浩一講演会

日時: 2006年6月6日 13:30~14:30
場所: 東京大学駒場キャンパス 18号館4Fコラボレーションルーム1
担当: 楊凱榮
講演者: 戴浩一 (台湾国立中正大学)
タイトル: 漢語構詞の兩個認知策略 (中国語の語構成における認知言語学の二つのストラテジー)

第71回: COE共催研究発表会: ドイツ語の構文認知

日時: 2006年6月10日 14:30~18:00
場所: 東京大学駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム3
担当: 幸田薫

司会: 森芳樹 (筑波大学)

講演者とタイトル:
幸田薫 (東京大学) 「コンピュータによる構文解析と認知」
稲葉治朗 (東京大学) 「文目的語と補文標識の位置についての類型論的一考察」
小深田祐子、西川由美子、森芳樹 (筑波大学) 「HAVE についての英独対照」
高橋亮介 (上智大学) 「ドイツ語の所有動詞と語彙概念構造」

第72回: COE共催研究会: 意味論研究会

日時: 2006年4月7日 15:30~
場所: 東京大学駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム2

担当: Christopher Tancredi
講演者: 須藤靖直 (東京大学)
タイトル: The Semantics of Reasons
講演者: Brendan Gillon (McGill University)
タイトル: Plurality and Reciprocity in English and in French

第73回: COE共催研究会: 意味論研究会

日時: 2006年6月30日 16:30~
場所: 東京大学駒場キャンパス 10号館2階L201教室

担当: Christopher Tancredi
講演者: 須藤靖直 (東京大学)
タイトル: Japanese Wh-doublings as Metalinguistic Variables
講演者: 中西克明 (東京大学)
タイトル: A Unified Approach to Questions, Quantifiers and Coordination in Japanese

第74回: COE共催講演会: 東京音韻論研究会

日時: 2006年7月23日 12:30~
会場: 東京大学駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム4

担当: 田中伸一
講演者とタイトル:
吉田健二 (インディアナ大学) 「伊吹島方言: 『式』の下降の制御 - 『中央式』との比較 -」
那須昭夫 (筑波大学) 「オノマトペの有声性と音配列をめぐって」
深澤はるか (慶応義塾大学) 「Restrictions on Relativized Faithfulness and Local Conjunction」

第75回: COE共催研究会: 意味論研究会

日時: 2006年7月28日 14:00~
場所: 東京大学駒場キャンパス 18号館4階コラボレーションルーム3

担当: Christopher Tancredi
講演者: 窪田悠介、E. Allyn Smith (Ohio State University)
タイトル: The Japanese Internally Headed Relative Clause is not an E-type pronoun

第76回: COE主催講演会: スーパー講演会

日時: 2006年8月28日 14:00~15:00
場所: 東京大学駒場キャンパス 2号館308室
担当: 丹野義彦
講演者: Joachim Stoeber (英国ケンツ大学)
タイトル: Perfectionism

第77回: COE主催研究会: Curry会第4回

生体信号の解析手法勉強会
日時: 2006年9月5日 15:00~16:30
場所: 東京大学駒場キャンパス 3号館113室
担当: 大塚明香
講演者: Evelyne Mercure (ロンドン大学)
タイトル: Brain lateralisation for words and faces: A question of spatial frequency?

東京大学 21世紀COE「心とことば」進化認知科学的展開

〒153-8902 東京都目黒区駒場3丁目8番1号
東京大学駒場キャンパス17号館

TEL / FAX 03-5454-6709

ホームページ <http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp>

発行日 2006年10月31日